



◆其の八十九
Go to 大宰府
(南北朝編)

鎌倉幕府を滅ぼした後醍醐(ごだいご)天皇は、建武(けんむ)の新政をはじめますが、多くの武士の反発を招くことになり、やがて朝廷自体が2つに分裂する南北朝時代が幕をあけます。

この争いは、政治経済の中心であった畿内だけではなく全国各地に広がり、北朝勢力が強い状況でした。

そこで後醍醐天皇は、息子たちを全国に派遣して南朝方の勢力拡大を図ります。その一人、懐良(か



ねよし)親王は九州南部に入ると肥後の実力者である菊池氏を味方につけ、やがて九州の重要拠点である大宰府をうかがうようになります。

九州の南側から大宰府を目指すとき「ちくしの」は、避けては通れない地理的位置を占めています。そのため、1353年針摺原(現在の針摺周辺と考えられる)で起きた戦いで北朝方と南朝方が衝突します。この戦いに勝利した南朝方は、やがて大宰府をおさえることに成功し、九州は南朝方が優勢となりました。

大宰府は古代より九州を統括する中心地であり、中世においてもその名と場所は象徴的な存在であり続けました。それ故に懐良親王は、大宰府を目指し北朝方はそれを阻止しようとしたのです。同じようなことは、後の戦国時代にも起こります。

日本史の中で屈指の争乱の時代である南北朝時代と戦国時代。混乱の時代に「ちくしの」の地はその重要性ゆえに争いの渦からは逃れられないのです。

問文化財課

